



子育てを考える

第2回

学童期の子育て② 学童期前期の子どもたち

香川子ども子育て研究所 所長 常田 美穂

発達の前

一般に学童期は、7歳から12歳まで、小学校6年間の時期を指します。この6年間のちょうど真ん中である9～10歳頃に子どもたちは「発達の節目」を迎えます。なぜ節目かと言うと、その頃を境に子どもたちのものの見方や感じ方ががらりと変わるからです。

個人差はありますが、およそ9～10歳になると、自己意識と呼ばれるものが育ってきます。単に何かを思ったり感じたりするだけでなく、自分の思いや考えは他の人から見るとどうなのか、同じ事柄をめぐる自分のとらえ方と他人のとらえ方との違いを意識し始めるのです。

この自己意識がまだ育っていない学童期前期の子どもは、実に無邪気です。泣いたり怒ったり甘えたり、自分の気持ちをストレートに表現しますし、大人の言ったことを素直に信じて、学校での決まりも進んで守ろうとするでしょう。

学童期前期に育つ知的な力

学童期に入ると、おはじきを色と形という一定の基準に沿って分類できるとか、長さの違う10本の棒を短い順に並べることができるといったように、具体的に現実的な論理の力が育ってきます。こうした論理操作の力は、学習の中だけでなく、遊びでも発揮されます。友だちと新しいゲームを考え出したり、鬼ごっこでも、よりスリリングな気分を味わうためにルールを工夫したり、ごっこ遊びでも、物語の筋や役のディテールに凝ったりします。

このように、物事を論理的・客観的にとらえ始めた子どもたちは、自分が何をどのくらいできるのか/できないのかについても現実的な認識を持ち始めます。そのため、自分がどの程度できるのかが、表のようなもので具体的にわかったり、自分の能力を正当に評価されたりすることを非常に喜ぶ一方で、自分の「でき

なさ」や「がんばれなさ」を自覚して、劣等感を持つこともしばしばあるのです。

「努力する力」を育てるのは今

物事の仕組みが少しずつわかってきたこの頃の子どもにとって、大人は、自分にはまだ手に負えない事柄を当たり前のようにやりこなす、すごい人。その意味で、この時期の子どもは大人をととても尊敬しています。そんな大人から、他の子(兄弟や友だち)と比較してダメさを指摘されることは、それがたとえ子どもを奮起させるつもりでなされたとしても、子どもの心を傷つけてしまいます。できないからあきらめるのではなく、劣等感を乗り越えて努力する力を育てていくためには、身近な大人が、他の子との優劣ではなく、その子自身の伸びをきちんと評価してやる必要があります。「前よりできるようになったね。」その一言がこの時期の子どものやる気を引き出し、努力できる人に育てます。



常田 美穂(つねだ みほ)

- 2009年 北海道大学大学院教育学研究院 博士後期課程修了
愛知県立大学等で非常勤講師、保健センター・心療内科等で発達相談員を務める
- 2011年 NPO法人わははネット内香川子ども子育て研究所所長
- 2012年 臨床発達心理士として活躍中

